

やっぱり、 誤訳

欠陥翻訳時評



だったのか！

別宮貞徳

やっぱり、 誤訳 だったのか！

欠陥翻訳時評



別宮貞徳

The Japan Times

〈著者紹介〉

別宮貞徳（べっく・さだのり）

1927年東京生まれ。東京大学理学部動物学科、上智大学文学部ラテン哲学科を経て上智大学文学部英文科卒。同大学院西洋文化研究科修士課程修了。元上智大学文学部教授。翻訳家。1978年より雑誌『翻訳の世界』（バベルプレス）に「欠陥翻訳時評」を連載。210数回をかぞえる。本書は著訳書112冊目にあたる。最近の著書に『焼け跡にバッハが聞こえる』（ヤマハ・ミュージックメディア）、『特選 誤訳 迷訳 欠陥翻訳』（ちくま学芸文庫）、『欠陥だらけの大学英語入試』（マガジンハウス）など、訳書に『ハプスブルク帝国衰亡史』（原書房）、『ミレニアム』（NHK出版）、『クラシック音楽の新しい聴き方』（ヤマハ・ミュージックメディア）などがある。

やっぱり、誤訳だったのか！

―欠陥翻訳時評

1996年12月5日 初版発行

著 者 別宮 貞徳

©1996 by Sadanori Bekku

発行者 小笠原 敏晶

発行所 株式会社 ジャパンタイムズ

〒108 東京都港区芝浦4-5-4

電話 東京(03)3453-2013 [出版営業]

(03)3453-2797 [出版編集]

振替口座 00190-6-64848

印刷所 株式会社 太平印刷社

定価はカバーに印刷してあります。

ISBN4-7890-0860-6

Printed in Japan

やっぱり、誤訳だったのか！／目次

目次

- 1 うそから出たたわごと エーレンライク「中流」という階級」 6
- 2 ヤラセはユルセない ポーリット「地球は救える」 19
- 3 無学無知無恥無責任、無謀無理無茶無分別 ソロモン「アメリカの素顔」 30
- 4 手抜き、尻抜け、○抜け ボバード「アメリカ貿易は公正か」 40
- 5 「ケタやぶり」の大欠陥 ヘイリー「大空港」 55

6 あてにならぬは…… ラッセル+レイン「愛のレッスン」 65

7 七光りは通じない ホアウッド「スカヤグリーグ」 79

8 カンヤク、カンアク、カンカンガクガク ストー「孤独」 89

9 ○○○が不自由な人 パークス「死別」 100

10 キツネにつかれキツネにつままれ マクドナルド「野ギツネを追って」 110

11 新春おもしろクイズ大会 クライフ「微生物の狩人」 120

12 ^ア_{バウト} ^{ウイズ}_{アバウト} "About" (アバウトとの戦い) B + J コールズ「低湿地の考古学」 137

13 頭がなければあがれない マッカーナ「ケルト神話」 148

14 落語「ゼネコン八百屋」 マレー「イタリア・ルネッサンスの建築」 163

15 米長、ジーク、そして…… ヒルトン「ラファエル前派の夢」 174

16 ウソも鳴かずば撃たれまい ローゼン「シェーンベルク」 185

17 QUID、QUIS—QUIZ デソヴィツ「王様氣どりのハエ」 200

18 クイズ大会後始末 「王様氣どりのハエ」クイズ解答篇 213

19 楽屋裏嘶種々相 がくやうらはなしのとりどり 番外篇——未掲載「欠陥書」から 226

20 めでたくもあり、めでたくなくもあり 番外篇——二〇〇回をかえりみる 240

あとがき 252

装丁 本山吉晴
編集協力 浦辺京子

欠陥翻訳時評

やっぱり、誤訳だったのか！

1 うそから出たたわごと

バーバラ・エーレンライク 『「中流」という階級』

いつかサイデンステッカーさんがおもしろいことを言っていました。いくら酷評されても書評が出るのは出ないよりましだって。そうかもしれないですね。立場を替えて批評家の側からすれば、著者に対していちばんきびしい姿勢は徹底的な無視だっていうし。酷評は少なくとも無視されずにすんだのだから、著者は、ああ目に止まったかと喜んでいいわけ。

サイデンさんの場合は翻訳だけど、もうひとつ名言があります。「くれぐれも翻訳の冒頭とオチに気をつけること。書評者はそこしか読まないから」。もちろん半分は冗談ながら、書評者に対する不信はある程度あたっていると思いますね。

ところで書評にとりあげられている翻訳書で、内容とは別に翻訳そのものが批評の対象になっていることはめったにないでしょ。これ、しょうがないんです。フツウの人には、日本語をさーっと読んだだけで翻訳がいいとか悪いと言えるわけないから。読みやすいとか読みにくいか

だけで。時々エラい評論家先生が、おれはフツーの人じゃないって調子で、原本と引き合わせて翻訳にまで目を向けることがあるんですが、これがまたのはずれのが多くってね。サイデンさんが江藤淳氏の批評を紹介しています。「関西」をwestern Japanとしたことに文句をつけたんだそうです。それじゃ中国地方から四国、九州まで入っちゃうじゃないかって。水田洋氏にもひどい翻訳評がありました。「原本にはない『しかし』が入っている」！ そんなこといつてたら、翻訳なんてなりたたない。

ところがね、フツーの人でもこの翻訳おかしいんじゃないかと判断できる場合がある。それは訳文を読んでまるつきり理解できない、つじつまが合っていないやつ。純真な読者はわからないのは自分の頭が悪いせいだろうとよく思うんですが、そんなことない。絶対に翻訳が悪いせいです。そしてそういうところがたくさんある本は、本来書評にとりあげられるわけがない。書評以前の問題で、それこそ評者の立場からいえば、徹底的に無視してしかるべきものですからね。

ところがそんなものでも堂々と書評欄に顔を出すから世の中わからない。バーバラ・エーレンライク著、中江桂子訳『「中流」という階級』（晶文社）。目にとまったものだけでも産経、日経、読売、朝日と四紙に書評がのっています。そのうち日経は東京経済大桜井哲夫教授、朝日は北大山口二郎教授の署名入り。

率直におたずねしますが、皆さん、この翻訳ほんとお読みになったんですか？ ぼくは本屋へ欠陥翻訳候補をさがしに行つて、この本をパラパラめくつてみたら、たちまち理解できない文

章が目にとびこんできた。

高校生なみの英語力と状況判断のなさ

※(知識と技術は、本当の資本と異なつて) 厳しい時代に備えて蓄えることはできないが、個人の生涯を超えて保存されるし、もちろん相続させることもできる。(二四頁)

訳者先生、そして評者先生、あなた方さぞかしりっぱな知識をお持ちなんでしょうが、ご自分が死んだときにそれをお子さんに相続させられるとお思ひですか。それができるんなら教授の子供は、親が死んだとたん、小学生でも教授になれる。

... these cannot be hoarded against hard times, preserved beyond the lifetime of an individual, or, of course, bequeathed. (B. Ehrenreich, *Fear of Falling*, Harper Perennial, p.15)

試訳をつけるまでもなく、否定が文末までつづいているのに途中で切ったというお粗末。そのあと「この『資本』は、財産よりもはるかに短時間に消え去ってしまうものだし、それぞれの個人の生身の努力と献身を通じて刷新されなければならない」と書かれているのに、自分で何を書

いているかおわかりでないらしい。さらに、その次の文章、

※この階級（専門職の中流階級）では、だれも自己鍛錬と自己管理を要する仕事から逃れられない——彼らはそれぞれの世代で、かつて自分たちが親たちを罰したように、若者たちに罰せられる。（二四頁）

これ、いったいなんのことですか？「親たちを罰した」とおっしゃる。親が何か悪いことをしてかしたんですか、そんな話はひとつも出てこないけれど？そして今度は自分が若者たちに罰せられる？ヤブからボーじゃなくてヤブからバチだ。

In this class, no one escapes the requirements of self-discipline and self-directed labor; they are visited, in each generation, upon the young as they were upon the parents. (p. 15)
〈試訳〉この階級の人にはだれひとりとして、自分で修練を積み、自分で決めた仕事をするという要件を免れることはできない。それは世代がめぐること、親と同じく子供にも降りかかってくる。

説明するだけヤブじゃなくてヤボってものだけど、theyはrequirementsを指します。とりち

がえた結果が荒唐無稽のままシラを切られちゃシラけちゃいます。とんだシャミセン、バチ当たりだ。というわけで、欠陥候補に選んだのがズバリ当たったんですが、改めてはじめから原文と照らし合わせてみたら、これはもうハンパじゃない。それこそトホーもないと言わざるをえませんね。まずはまるつきり英語ができない。高校生なみでしょう。できの悪い生徒がよくやる手で、わかつているつもりの単語だけ拾ってつなげる。文法もクソもなしです。

そして、英語力のみならず、状況の判断力もない。つまり、内容、論旨がつかめていない、著者が何を言おうとしているかわかってないんです。たとえば、専門職中流階級っていうのは数の上ではほとんどマイノリティなのに、その「文化」が世間にみちあふれていて、まるで全体を代表しているみたいだという主張を展開しているところで、

※中流階級の理想と装いはどこにでも見られるし、アメリカ人自身の心の中に、気づかぬうちに潜んでいる。中流ではない社会階級を出身とする人々は、自分たちが考える「べき」だと思っていることが、しばしば中流階級の考え方と同じものであることに気づく。そして、専門職の作家たちをはじめとして、この階級のなかに入るさまざまな人々にとって、中流ではない人々と共通の趣味や心の習慣をもつことはもとより、自分の考えることと社会的に必要なことを区別するのは、至難の技である。(二三頁)

第一のセンテンスも単語の意味がちがってるんですが、それはあと回しにして、その次。中流ではない社会階級を出身とする人々——下層階級は、自分たちが考える「べき」だと思っていることが、中流階級と同じであることに気づく——つまり、「そうか、おれたちがこう考えるべきだ」と思っているとおりに、この連中も考えてるんだ」と気づく。

だからどうだってんですか？ 「こいつア、ありがてエ。みんなおんなしように考えてくれるんだ」ってなもので、ある意味じゃめでたしめでたし。どこからも反対が出なくて、社会問題はあらまし消えてなくなりますよね。そのあと「専門職の作家たちをはじめとして」以下は論旨にどんな関係があるんだろ？ 中流階級の人が下層と同じ趣味、習慣を持つのはたしかにむずかしいでしょう。で、それがどうだっていうの？ 「社会的に必要なこと」って何？ それと「自分の考えることを区別する」って何？ 至難の技もヘチマもない。内容をくみとるのが至難の技。

Its ideas and assumptions are everywhere, and not least in our own minds. Even those of us who come from very different social settings often find it hard to distinguish middle-class views from what we think we *ought* to think. And for those of us who are inside this class, as most professional writers are by definition, if not also by virtue of shared tastes and habits of mind, the effort can be overwhelming. (p. 5)

まず idea は「理想」じゃないし、assumption は「装い」じゃない。not least が「気づかぬうちに」なんてどこから出てくるんですか。

中流階級の意見は、実際はマイノリティだから、アメリカ人一般の意見とはほんとうはちがうはずなんです。下層階級は中流階級とちがう意見を持っているのに、あまりマスメディアで中流の考え方がゆきわたっていて、まるで全体を代表しているみたいだから、自分はそれとちがつてはいけない、自分も同じように考えなければいけないように、下層階級の人でさえそう思ってしまう。

そして、当の中流の人間には、その二つを別と考えるのは、ますますもってむずかしいわけ。as most professional writers are by definition——professional writers は professional と定義されているから、当然 professional middle class に属するにきまっています。if not は英語にしようちゅう出てくる言いまわしで、「くではないにしても」。こんなことまで説明しなければならぬとは、予備校の授業か、家庭教師のバイトの感じですね。以上で試訳は次のとおり。

〈試訳〉 中流階級の考えや思いこみはいたるところに見られる。とりわけわれわれ自身の頭の中にひそんでいる。そのため、中流とはまったく異なる階層の出身者でさえ、中流階級の意見と、自分が持つべきだと思っている意見とは別ものであることがわからなくなっている。まして専門職中流階級に属する人間には——専門のモノ書きは、趣味や思考法までほかの成員と同

じではなくても、定義上それに属している——この二つを区別することはとうもなくむずかしいだろう。

中流階級は、差別され、しいたげられる下層階級など存在しないと考えているが、それはあまりだというのが著者の一貫した姿勢で、少年の非行も階級差別の結果ではなく、別の原因から生じたもののように説明されることが多いと述べて、その例をいろいろあげています。ところがその次に書かれていることが、まるつきり意味をなしていなくて、論旨は行きどまり、出口なしになっちゃった。

「否定」を「肯定」にするのも朝飯前

※……少年非行は、低賃金や卑しい労働にしいたげられ、階級にうまく順応できなかった一員のことではなく、「逸脱者」——すなわち事柄のより大きな（中流階級という）枠組みに順応できなかった人のことであり、精神的な病氣や故意の失業などと同じ一般的カテゴリーに分類されている。

少年非行は、階級という問題を浮かび上がらせるものではあったが、一方では、階級から気楽に目を逸するための手段にもなった。もし白人の中流階級の知らない階級やライフスタイルが他にも存在していたなら、非行少年たちは白人中流階級の標準からの「逸脱者たち」とは見

なされずにすんだであろう。結局、少年非行は中流階級の視点から見れば、発言不全の子供はこんなにひどい状態になってしまふのだという自分自身への警告であり、またそれは下層階級の人々から中流階級への潜在的な脅迫にもなっている。(三二頁)

The juvenile delinquent was... not a possibly well-adjusted member of a class ground down by low wages and menial labor but a "deviant," someone who had failed to adjust to the larger (middle-class) scheme of things, and classifiable in the same general category as the mentally ill and the willfully unemployed.

Simultaneously, the JD raised the issue of class and provided a comforting distraction from it. If there were other classes, other ways of life than that known by the white middle class, they could be seen as "deviations" from the white middle-class standard. And since the JD was, after all, a juvenile, the potential menace of these lower classes took on, from a middle-class perspective, the diminished stature of a child. (p. 23)

〈試訳〉 非行少年は、低賃金と下賤な労働に呻吟するある階級（下層階級）に所属して、そこでひよつとするとまぐ適応している成員なのではなく、むしろ、もっと広い中流階級という枠組みに適応しそとなった「はみだし」と見られ、精神病者や意図的失業者と同じカテゴリーに入れられるものとなった。

少年の非行は階級の問題を提起すると同時に、そこから注意を転じさせるような（階級差別